

洞爺湖とトマムの旅 2020



2020年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

今回の旅は北海道を代表する豪華な宿に泊まるというもので、GoTo トラベルキャンペーンを使って妻と2泊3日のパックツアーで行ってきた。

■ツアーは満員

7月から始まった GoTo トラベルキャンペーン（以下 GOTO）は当初は低調だったが、9月になって利用者が増え今回私たちが利用したパックツアーも35人参加ということで満員になっていた。

私も妻も国内旅行にパックツアーを使うことは滅多にない。それなのに今回パックツアーを使う理由は GOTO の利用に便利なことだが、それだけではない。私が聞いた話では業界大手の旅行会社の社員でさえ今年の冬のボーナスはゼロだという厳しい現実があつて、交通機関や宿泊施設だけではなく旅行会社も潤うようにパックツアーを利用することにした。

GOTO の宿泊補助金の割合は35%だが、補助の絶対額が多い豪華な旅に人気が集まっている。今回のパックツアーの正式名称は「GOTO 適用 星野リゾートトマム ザ・タワーとザ・ウインザーホテル洞爺リゾート&スパにてフランス料理を食す 北海道3日間」という長いもので、何とか高級感を出そうと苦慮した末に全て並べたようだ。

しかし高いから満足するという単純な発想には思わぬ落とし穴があるのは世の常でもある。

札幌に行く飛行機の中は私たちと同じようなツアー客が多く、私たちが利用している阪急交通社だけでも4つのコースに参加するツアー客で席が埋まっている。近くを通りかかったCAに聞くと、この便は満席とのことでCAの顔にも笑みが感じられる。

偶然隣の席に座った私と同じツアーのお客と話をすると、最近多くのツアーを申し込んでいるが満席で簡単に予約が取れないとこぼしている。やはり誰もが秋になって今までのうっぶんを晴らすかのように GOTO を使って旅行に出るようだ。

周囲を見渡すと私たちと同年代か少し上の人たちばかりで、さすがに平日なので現役世代はいない。それにしてもこの人たちは一体何を求めてこのツアーに参加したのだろうか。

新千歳空港で待っていた現地添乗員に案内され、バスに乗り込むとまずは手厚い歓迎の言葉が待っていた。

新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）のために添乗員は今年になってまだ2度目の添乗で涙が出るほど嬉しいと訴えている。バスガイドも半年ぶりのガイドの仕事だという。彼女は北海道在住で、冬は沖縄で、春から秋は北海道で仕事をしているという。今回は1月に沖縄で仕事をして以来だというので歓迎の弁には熱がこもっている。それにしてもそんな渡り鳥のようなバスガイドがいるのかということに私は驚いてしまった。

テレビのニュースで各地方の観光産業に携わる人たちの状況を見聞きしていたが、さすがに現地に来ると切実感があって感じ入るものがある。運転手も含め30代から40代の働き盛りが仕事をしたくても出来ずにいた訳だから個人にとっても社会にとって損失は計り知れない。

■サミットの宿

本日泊まる宿は洞爺湖を見下ろす高台にある「ザ・ウインザーホテル洞爺リゾート&スパ」で、何と言っても2008年に主要先進国首脳会議（サミット）が開かれたということで有名だ。宿に入るとまずは大きなロビーから眺める景色が歓迎してくれる。そしてこの景色が圧巻だ。

3階までを吹き抜けにした解放感抜群のロビーは縦長の何枚もの大きなガラスに越しに洞爺湖を眺めることができ、何人ものお客が記念撮影をしている。このロビーも含めて洞爺湖を臨む景色がこの宿の最大の売りになっている。そして洞爺湖の見える反対側にも同じようなガラス張りのロビーがあり、こちらは緑の森を見ることができる。普通の宿ならばこの反対側だけでもお客は満足するのだろうが、こちら側には誰もお客がいない。



<ホテルのロビー 洞爺湖を臨む>

このホテルは欧米スタイルで館内を歩くのに浴衣姿はいけないとか、レストランにもそれなりの格好で行く必要がある。さらに大浴場はホテルの端にあって完全にわき役に追いやられているから、入浴にはかなりの距離を歩かないといけない。私たち夫婦もそうだが同じツアーのお客た

ちは一般的な日本の高級温泉ホテルをイメージしていたらしく戸惑いが隠せない。

大浴場はそれなりには立派だが、私がホテルの格から期待していたレベルには届かない。さらにコロナ対策でサウナも使用できず、サウナ大好きな私は意気消沈せざるを得なかった。私の持論で、期待し過ぎて期待値に届かない反動を「期待と落胆」と呼んでいる。

風呂上りにはビールと想っていたが、館内に自動販売機は1台もなく売店もコロナ対策で開いていない。唯一部屋のミニバー（冷蔵庫）に缶ビールがあるが、これが驚くほど高い。

私が宿に求めているものに対して、宿が提供しようとしているものが違うということに徐々に気が付いてくる。

夕食はお洒落なレストランに案内され、もちろん大きな窓ガラス越しには洞爺湖を見ることができる。

早速「何か飲み物をお持ちしましょうか？」とドリンクメニューを渡されたが、その値段にまたしても驚く。ある程度は予想をしていたが、ゴルフ場のビールの値段の3倍くらいする。完全に私の予想を超えていたが、こんな見事な景色を見ながら何も飲まない手はない。風呂上りなのでグッと冷えた生ビールをと思いメニューを見ると、私がお目当てのあのビールはない。仕方なく普通のビールを注文した。それでも妻と洞爺湖の景色に乾杯して、今回のツアー最初の食事がスタートする。

その後に出てきた料理には徐々に驚きが増していく。地元北海道の選りすぐりの高級食材を使って上品に仕上げられており、もちろん美味しい。さすがにサミットが開かれただけのホテルはレベルが違う。

この料理を食べながら再度感じたことは、私は一般的な日本の高級温泉ホテルで出される和洋折衷のような料理をイメージしていたが、出てきたものは完全にフレンチのコース料理だ。ここでも自分の予想や期待と違っていた。ただ料理は満足できる内容で「期待と落胆」にはならず、むしろその反対の「偶然と感動」になった。

レストランを出る時に分かったことが、今食べたコース料理の値段が1万円と書かれていた。旅行会社があらかじめ頼んでいたのだから知らなかったが、改めて噛みしめることになった。

入口付近で記念写真を撮っている同じツアーのお客に声を掛けると、あまりに高かったので何も飲み物を注文しなかったと言っていた。

■夜の洞爺湖

食事も終わり部屋でしばしゆっくりくつろいでそろそろ寝ようかと思い、カーテンを開けて窓の外を覗くと驚くような光景を見ることになった。

それは満月の明かりが洞爺湖の湖面に反射して幻想的な洞爺湖を映し出している。さらに湖面と月の間にある雲の影がうっすらと湖面に映り込んでいるのも素晴らしい。こんな幻想的な光景は私もあまり見たことがなかった。思わずあの高いミニバーのビールを開けて乾杯をしてしまった。

部屋を真っ暗にして妻と二人で一時間ほどこの光景にしたっていたが、これを見ることができただけでこの宿に泊まった価値があったかのように思えてきたから不思議なものだ。

眼下の湖畔には洞爺湖温泉街の灯りもあり、洞爺湖を含めそれらを上から眺めることになるので妙な優越感を持つことになる。この優越感こそがこの宿の最大の売りかもしれない。



<部屋から眺める夜の洞爺湖>

■バスガイドの話

翌日はバスに乗って小樽に立ち寄りトマムに向かう。バスの中ではバスガイドの独演会が始まる。彼女はまるまる北海道弁で、実に親近感が湧く面白いお姉さんだ。いやお姉さんと言うには少し無理があるかもしれない。彼女は細部に渡って道民目線で説明してくれる。それはもはや説明というよりも完全に自分の世界に入り込んでいると言った方がいいかもしれない。

彼女がバスガイドになったばかりの頃にお客から「なぜ北海道の家には雨どいがないの？」という質問に対して彼女は“雨どい”を知らずに「そうですね、北海道は広いから土地がたくさんありますので・・・」などと適当にごまかしたら同行の運転手から休憩時間に「おめえ、雨どい知らないだろう」と言われたという。私は北海道の家に雨どいがないことを初めて知って、それ以後は景色よりも家の屋根を見るが多くなった。

あるいは手袋については「手袋をはく」と当たり前のように彼女が話をしたらお客はキョトンとしていたとか、それらのエピソードを何も屈託なく北海道弁で話すのだから面白い。

この辺りの土地は〇〇県出身の開拓者が多いので、名物はそこにちなんでこんなものがあるとか言っている。それも一カ所だけでなく行くところ行くところで同様な話が出てくるから本当に北海道のことを知り尽くしている感じがする。

ラーメンの話も分かり易かった。札幌ラーメンは味噌味で黄色い太い玉子麺、旭川ラーメンは醤油味で細いストレート麺、函館ラーメンは塩味だが具が極めて少ない。ただラーメン談議は人それぞれで好き嫌いがあり、必ず反論が飛んでくるので良し悪しはタブーだと言っていた。

それにしてもこの北海道弁丸出しの北海道のことしか知らないバスガイドが沖縄でどんなガイドをしているのか、私はそちらの方に興味が湧いてきた。

■小樽

昼に小樽に立ち寄る。私も妻も小樽にはもう何度となく訪れており、今さら見ることもないと思っていたがパックツアーなのでお付き合いすることになる。昼食と散策に2時間もあてがわれており、全て自由行動になっている。

よく知っているはずの小樽だがゆっくりと街を歩いてみると、意外にお洒落な街に変貌している。観光客も多く、一般の観光客以外にたくさんの修学旅行の生徒も散策している。コロナを乗り越えて活気が戻ってきただけでなく、小樽の街は何か生まれ変わったようにも思える。

たまたま入った店で食べた海鮮丼が500円という値段ながら旨かった。一緒に頼んだ生ビールはサッポロクラシックだ。このビールは北海道限定販売で私好みの味で、実は昨夜のウインザーホテルの夕食で私はこれを望んでいた。サッポロクラシックは私の家の近くでも買うこともできるが、それは缶ビールだけで生ビールは北海道に来ないと飲むことができない。

運河には多くの鮭が遡上している。鮭は川で産卵し、ふ化すると海へ出ていき数年後に生まれた川に遡上する。この鮭たちも私同様に小樽の街の変貌に驚いているのかもしれない。

■星野リゾートトマム

北海道のほぼ真ん中、占冠村にある「星野リゾート トマム」が本日の宿だ。私はツインタワーの宿ということだけ知っていたが、そもそもそこから認識が違っていた。実際に行って分かったことは実はツインタワーは2揃いあり、都合4棟のタワーが建っていた。



<2揃いのツインタワーの星野リゾートトマム>

このホテルのお客は若者が中心で、小さな子供を連れた家族連れも多い。明らかに私たち中高齢のツアー客は少数派だ。こんな若者たちが高級宿の星野リゾートに泊まるとは驚いてしまうが、高校生の修学旅行の一行も泊まっている。エレベーターの中で話を聞いたら姫路から来たという高校生たちの学校では毎年この宿を利用しているという。

広大な北海道の大自然を舞台に星野リゾートの提供するものはスキー、テニス、トレッキング、グランピングといったものだが、それらの定番以外にも多くのアトラクションがある。

ロビーの一角で数人のスタッフが打ち合わせをしている。ホワイトボードに書かれた内容から察すると明朝に高校生たちが参加するラフティング（川下り）の事前打ち合わせのようだ。修学旅行でラフティングとは、恐れ入ってしまう。私は修学旅行の変貌ぶりに驚きながら、旅のスタイルが変わりつつあることを肌で感じることになる。

レストランから部屋に戻る途中で館内のポスターで面白いものを見つけた。それは幼い子供向けの「ヤギの郵便屋さん」というイベントで、子供が手紙を書くと郵便配達員の格好をした山羊が配達するというものだ。

その他にも「羊と一緒にハンモック」、「牧草ベッド」なんというものがあるから、大自然の中の牧歌的な北海道らしさを活かしたイベントが多い。

さすが星野リゾートはよく考えていると感心する。



<ヤギの郵便屋さんのポスター>

■星野リゾートトマムの夜

アトラクション以外にレストランや食事のシステムにも驚く。

タワーの内部だけでなく、敷地内にはいくつかの大きなレストランがある。夜にはそれらのレストランは照明によって幻想的なものになっている。

大きなレストランは星野リゾート直営だが、小さなレストランは中華、イタリアン、ジンギスカン、寿司などの専門店がテナントで入っている。それらは20店舗くらいあって森の中にお洒落な戸建てで建っている。

各レストランの間は木道で繋がっていて、ちょっとくつろぐため椅子が置いてある。驚いたのはそれらのベンチの真ん中には焚き火がある。それも何カ所かにある。北海道の秋は夜になると結構寒い。そこで暖をとりながら焚火の炎を見ながらの語らいは、キャンプや最近流行りのグランピングのようで、これは若者たちの受けが良くなるのは容易に想像できる。

焚火は宿が用意したもので、灰や炭が残っていないので恐らくガスか灯油で燃やしている。それでも薪で燃やした焚火のように見えるから凄い。この演出には恐れ入ってしまった。



<森の中のレストラン>



<焚火で語り合うお客>

宿泊客はレストランを自由に選べるようになっており当然宿泊費とは別費用で、私たちのパッケージツアーにはこれらのレストランで共通に使えるクーポン券が一人 2500 円付いている。昨夜のウンザーホテルの夕食が 1 万円だったのに比べると少ない気はするが、選択肢が多いのでそれはそれでありがたい。

それにしてもこの食事のシステムは事前に知っていればともかくも、初めてのお客、それも年配者は面食らってしまうだろう。事前予約が必要なレストランとそうでないレストランがあって、予約のいないレストランは混んでいることが多く並ばないといけない。その待ち時間などの情報は部屋のテレビか館内に飛んでいる Wi-Fi によりスマホで分かるようになっているが、英文やカタカナ表示が多くて年配者には厳しいかもしれない。

さて夕食は何にするか、昨夜は高級フレンチだったので今夜は高級志向ではなく 2500 円にこだわって、さらにバスガイドのラーメン評を思い出してラーメン専門店にたどり着いた。サイドメニューや飲み物も含め 2500 円を使い切った。味も量も満足できる夕食になった。

私は同じ星野リゾートの宿で青森屋に泊まった時にそこの大浴場に感激した。このトマムでも大浴場を経験してみたかったが、残念ながらコロナで閉鎖されており入浴は叶わなかった。

仕方なく部屋の風呂で我慢することになるが、移動がないのはそれなりに楽だ。おそらく昨夜の宿同様に大浴場へは浴衣姿では行けないので、ものは考えようかもしれない。

風呂から上がってくつろいでいると敷地内で花火の打ち上げがある。ちょうど私たちの部屋から見える場所で打ち上げているからありがたい。満員という宿泊客の多くがこの花火を満喫しているのだろうと、花火見の乾杯をする。

■宿の変貌

私たちが泊っているタワーの部屋は面白い造りをしている。4 人分のベッドが並んでいて、洗面所とトイレとユニットバスは同じものが 2 つある。かつては入口だったような部分もあるから 2 つの部屋をリフォームして 1 つの部屋にしたようだ。

横一列のベッドでは枕投げもできるから高校生たちが修学旅行で泊まるにはちょうどいいかもしれない。あるいはゴルフも 4 人、スキーにきた家族連れも 4 つくらいベッドが必要だ。

これは明らかにお客のニーズを把握して、リフォームしたと考えられる。

調べてみるとこの施設は星野リゾートが作ったものではない。北海道庁が主導し占冠村と民間会社が第三セクター方式で 1983 年に「アルファリゾート・トマム」として開業した。スキー客中心の一大リゾート施設で、以降はゴルフ場の造成や施設の拡大に努め、山岳地帯では前例のない高層のタワーホテルもオープンさせた。

しかしバブル崩壊で経営が立ち行かなくなり迷走し、最終的には星野リゾートへ売却した。星野リゾートは経営破たんした施設を独自の手法で再生するのは得意としており、その時にリフォームしたらしい。そして目を付けたのはスキー場のゴンドラで登れる最も高い所から見る雲海で、そこに「雲海テラス」を作った。それによって通年でお客が増えて 2013 年に年間来場者数が初めて 10 万人を突破した。

現在も星野リゾートが運営しているが、所有者は中国企業になっている。こんなところに来て中国の進出という時代の流れ、世界経済の変化を感じることになる。

中国企業所有ということは、コロナがなければ中国人観光客でひしめき合っているのは容易に想像できる。

■雲海の朝

名物になった雲海を見るために朝の 4 時 30 分から雲海テラスに行くバスが出るというので早起きをしてバス乗り場に行くが、残念ながら強風のために本日はバスやゴンドラは運行中止になっていた。私たちの泊まっているタワー付近は霧に隠れてほとんどが見えないから、上から見れば見事な雲海になっているのかもしれない。

仕方なく部屋に戻ってくつろいでいると、霧が徐々に晴れてきて部屋からも雲海が見えるようになってきた。雲海には朝日が差し込んでツインタワーが雲海に影を落とすという素晴らしい景色になった。

そこに時々赤い炎を見せながら熱気球が上がっている。これもまた意表を突く光景だ。そういえば雲海ツアーが中止になって戻って来る私たちとすれ違うようにバスに乗り込む一団がいたが、この熱気球体験のお客だった。



<部屋から見た雲海 タワーの影が映る>



<部屋から見た雲海 熱気球が見える>

このような北海道の特徴を活かした体験型の旅は幼児から小中高校生、そして若者やファミリー層に人気が高い。あるいは一部の中高年に至ってもかもしれない。旅のスタイルは大きく変わろうとしている。

朝食も夕食同様でいくつかの店から選べるのだが、私たちは一般的な朝食のレストランはきっと混雑すると考えて空いていそうな店を昨夜のうちに予約していた。それは北海道の食べ納めということで海鮮丼の店にした。私も多く旅をしているが朝から海鮮丼とはなかなか珍しい。

これも北海道ならではの朝食体験かもしれない。

■体験型の旅

帰りのバスの中で、バスガイドが自信ありげに「星野リゾートトマムはいかがでしたか？」と乗客に聞いていたが、乗客からは冷たい反応が返ってきた。大浴場に入れない、レストランの予約、食事のこと、やることがない等々、不満が多く聞かれた。私が心配したとおりで中高年には馴染みなかったらしい。

有名な高級宿に安く泊まれるという安易な考えからこのツアーに参加した人たちも多いのだろう。宿が提供している体験型の価値に対してツアー客の期待が合っていないのが原因だが、それを取り持った旅行会社にも課題がありそうだ。

体験型の旅についてガイドがまた何か言っている。

昔は函館の五稜郭に修学旅行生を案内していたが、皆つまらなそうに聞いていたという。どう考えてもわざわざ雄大な大自然が売りの北海道に来て、歴史という意味では本州や九州に比べて極めて浅い北海道の幕末の歴史を知ってもらうことに違和感があったという。

そんな中で最近の修学旅行は北海道を体験するようになってきており、農業体験や農家宿泊体験が増えている。受け入れる農家によって運不運がありそれを面白おかしく紹介してくれた。料理好きのおばあちゃんの家泊まり太ってきた生徒、ひたすら農作業の手伝いで土まみれで苦勞してきた生徒、メロンの選別だけやっていたのでその道のプロになった生徒、少なくとも五稜郭の歴史よりはずっと面白いはずだと北海道弁で熱く語ってくれた。

今回の旅を終えて、旅のスタイルが従来の見物主体の観光型から体験型に変化していることを肌で感じるようになった。しかし従来型の旅は無くなるかと言えば直ちにそうはならないから、今後これらは共存していくことになる。

気を付けないといけないことは、この旅はどちらの型なのか、この場所はどちらの型に合うのかということ意識する必要がある。それは“旅を作る側”はもちろんのこと“旅をする側”も旅の目的を意識する必要が生じてくるはずだ。そうでないと今回の中高年ツアー客のように不満につながってしまう。

旅の目的を明確にするというのは最近の私の持論のひとつで、それによって旅は充実したものになり、より多くの感動へと繋がっていく。そのような旅の目的論は、追々別の機会に触れていきたい。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っ各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

総合点(平均値)で5段階の75%、つまり3.75を一つの目安としている。その中でも特に4.00を超えることが大きなポイントだ。そのためには5の驚き感動が1項目以上あることになるのでそのオススメ度はかなり高い。

ウインザーホテル洞爺は泉質3、風呂3、料理5、コスパ2、サービス4、建物・部屋5、立地環境5、総合点3.85になった。泉質はカルシウム・ナトリウム-硫酸塩泉(低張性弱アルカリ泉、pHは7.8、湧出温度は72℃となっている。

星野リゾートトマムはコロナで大浴場に入れなかったため泉質と風呂の評価はできず、料理4、コスパ3、サービス3、建物・部屋5、立地環境5、総合点4.00になった。料理は各種専門店の選択制になっているので選ぶ店によって変化する。

■旅の記録

実施は2020年9月27日(日)～29日(火)の3日間、その行程を以下に示す。

- ・1日目 11時40分羽田空港集合、14時5分発JAL便にて新千歳空港着、
16時30分ウインザーホテル洞爺着
- ・2日目 9時ホテル出発、小樽自由散策と昼食、16時50分星野リゾートトマム着
- ・3日目 9時30分ホテル出発、エコリン村見学、13時発JAL便にて羽田空港着

全て含めた費用は2人で約11万6千円になった。内訳を示す。(全て2人分)

- ・阪急交通社へ払い込み106240円(2人分の交通費、宿泊費、夕食・朝食2回含む)
費用はGoToトラベルキャンペーン28000円×2が適用済
- ・その他 自宅～羽田空港往復1294円×2=2588円
ウインザーホテル洞爺での飲み物代3641円
昼食1日目(羽田空港内の吉野家)1000円
昼食2日目(小樽の食堂ポセイ井)2200円
昼食3日目(新千歳空港で軽食)500円